

1. 活動名称

卒業プロジェクト「旅を通して繋がる人びと」

2. 活動目的

私の卒業プロジェクトは、バックパッカーと呼ばれる旅行者の繋がりやコミュニティができる過程を、自身がバックパッカーとなり、旅という形でフィールドワークをすることで探る試みだ。本活動は、1年間の卒業プロジェクトをまとめる段階の活動のひとつとして、調査をさせていただいた方々に対してプロジェクトの成果を還すために行うフィールドワークだ。最終的に自身の旅の経験を本にまとめるにあたり、その本に登場する人びとに原稿を読んでもらい、感想をいただくことを目的としている。

3. 活動内容

活動の内容は大きく分けて2段階ある。1つは、7日間のフィールドワークで、もう1つは、帰国後にフィールドワークを経て得たものを最終的な成果物として完成させる段階だ。

過去2回のフィールドワークを踏まえ、出会った人びとから聞いた話や共に時間を過ごすことで自身が旅を通して感じたことを記述し、本研究の成果として卒業論文とは別に、短編小説（以下、小説）という形にまとめた。フィールドワークには小説の原稿を持参し、小説中に登場する方々（調査対象者）に読んでいただき、感想をいただいた。過去2回のフィールドワークにおいて調査対象者から得たものを、私なりに解釈し、形にまとめ、それを実際に見てもらうことで、フィールドワークの成果を還すことができるのではないかと考えたからだ。また帰国後、今回のフィールドワークで生まれたコミュニケーションをもとに、内容を再編集することで、最終的な成果物として小説を完成させた。そして完成させた成果物は、2019年2月8日～2019年2月10日に渋谷区 ギャラリールデコにて開催された、加藤文俊研究室フィールドワーク展 XV「ドリップ」にて展示し、1年間の研究の成果として来場者に向けて公開した。

このような一連のプロセスにおける第一段階として実施したフィールドワークでは、タイ・バンコクに滞在中にお世話になったゲストハウス「すいかハウス」と、タイ・チェンマイに滞在中にお世話になったゲストハウス「スローハウス チェンマイ」の2箇所へ訪問した。

4. 活動成果

フィールドワークでは、アクシデントに見舞われた。あらかじめ、活動場所となる「すいかハウス」と「スローハウス」のオーナーとは連絡を取り合い、滞在する旨は伝えていた。しかし、いざ現地に行ったところ、滞在一ヶ所目のすいかハウスでは、登場人物であるオーナーと日本人スタッフが退任していたのだ。事情を聞くと、日本に一時帰国したのち、タイに再び入国することができなくなるという突然のアクシデ

ントだったようなのだが、結果小説を読んでもらう人数は予定していた4人から、2人に減ってしまった。

このようなアクシデントはあったものの、読み合わせを行うことで、小説に書かれていた内容について、感想をいただき、新たな考えや経験について聞くことができた。すいかハウスで読み合わせを行なった、世界一周中の大学生のこうやくん（仮名）は、「実際に自分の経験を他者に語り直してもらうことで、今までの旅の経験がうまく自分の中でも整理できたかもしれない。」「自分がやってきたことはなんだったのだろうってよく考えていたけれど、この文章を読んで初心に戻れた気がする。」といったような感想を話してくれた。スローハウスで読み合わせを行なった、過去に単独で世界一周を経験したオーナーのあゆみさん（仮名）からは、「わたしが話したことに対して、こんな風に思ってくれていたことに驚いた。自分では大したことないと思っていたことでも、実はすごいことだったのかも。」「なんかこれ（原稿）を読んで、もう一回どこか旅したいな～って思っちゃった。最近、これからどうするか考えてたんだけど、背中を押された気分になった。ありがとう。」といったような感想をいただいた。実際に会って読み合わせを行い、話すことで、新たな気づきを得ることができ、小説を書く上で、ふたりに対する理解も深まった。たった2人のために、タイまで足を運ぶことができて本当によかったと感じている。また、過去2回のフィールドワークで聞いた話を踏まえて小説の原稿を作成したのだが、当時の記憶が曖昧だった箇所を確認することができたり、あまり公開されて欲しくない情報について確認できたりもして、成果物を作る過程において必要不可欠であるプロセスを踏むこともできた。

これらを踏まえ、日本に帰国後に小説を仕上げた。最終的に完成させた小説には、今回の活動を通して新たに話したことや、考えたことを、エッセンスとしてもともと書いていた原稿に書き入れた。そして、完成させた小説は、予定どおり加藤文俊研究室フィールドワーク展 XV「ドリップ」にて展示した。来場者とは小説を通してコミュニケーションが生まれ、旅の途中で出会った人だけでなく、日本で待っていてくれた人々にも成果を還すことができた実感している。今後は、最終的に完成した小説を、可能な限りもう一度登場人物のもとへ訪れ、手渡しする予定だ。これにて卒業プロジェクトとしては一区切りついたことになるが、今後も様々な場所へ赴き、文章を書くことは続けていきたい。



スローハウス あゆみさん



成果物として完成させた小説

「ちいさなものがたり」

5.謝辞

今回の活動実施に際して、資金面で多大なる助成をしてくださった湘南藤沢学会の皆様、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。